



JR藤田駅

先般の地震で震度6強が観測された国見町の被害

国見町の街並みはJR藤田駅に近い丘陵上に位置しており、町役場が立地する軟弱地盤とは地盤条件が全く異なっている。震度6強と被害とが一致しないのは当然と思われる。



軟弱地盤に新設された国見町役場の庁舎



軽微な被害を生じた国見町文化センター



タワー階段床の剥離



文化センター隣りの大千寺墓地



町役場の震度計



本が落下した文化センターの書架



タワー階段床の剥離(鉄骨の補強は東日本大震災の時のもの)



大千寺の転倒墓石はごく僅か。とても震度6強とは考えられない





JR桑折駅



桑折町役場旧分庁舎の瓦屋根崩落被害



1ヶ月前に中学校跡地に移転したばかりの桑折町役場



震度6弱の桑折町とその地震被害

住家の棟瓦と墓石の転倒状況で見ると、被害は国見町よりも桑折町の方が大きいと思われる

被害はその殆どが屋根瓦とくに棟瓦の落下と墓石の転倒のみ



桑折町役場の震度計

今回の調査のまとめ

今回の調査の目的は、東日本大震災から10年が経過した被災地の、幾つかの気になる地域の現状を自分の目で確かめておきたいことが一つ、そしてもう一つは、2月13日に発生した福島県沖の地震で震度が大きく出た幾つかの地域の被害実態を確認しておくことにあった。新型コロナの緊急事態宣言が発令されている中での調査には若干の後ろめたさもあったが、震災復興の過程や被害の実態を是非とも自分自身の目で確かめておきたいとの誘惑の方が勝っていた。実際に現地を確認できた点を以下に記述しておきたい。今回、訪問させて頂いた地域を行程順に記すと、3月8日に横浜を出発し、東北新幹線で福島まで行き、在来線の桑折駅と藤田駅で途中下車しながら仙台にて宿泊。2日目の9日は仙台駅前レンタカーで常磐道を利用してまず双葉町に入った。途中で地震による斜面崩壊の工事現場を通過したが、停車することは叶わなかった。双葉町からはほぼ国道6号線に沿って北上し、浪江町請戸地区、南相馬市小高地区、新地町、山元町などに随時立ち寄りながら仙台に戻って、もう一泊した。3日目の10日は仙石線で石巻に向かい、徒歩で門脇・南浜地区を見学させて頂いた。帰路は仙石線で仙台に戻り、そこから新幹線を利用した。

桑折町と国見町は今回はじめて被害調査のために訪れた。気象庁発表の震度は、国見町の震度6強に対して桑折町は震度6弱であったが、地域の被害程度は逆に桑折町の方が国見町に比して大きかった。地震計の設置場所の地盤環境によるところが極めて大きいと考えられるが、当然と云えば当然の結果であろうと思われる。町役場の担当者もそのことは承知しておられ「ここは地盤が悪いから」とのことであった。(気象庁は気象観測には十分な観測条件の配慮をされるのに、地震観測ではなぜ同様の配慮をされないのかと、余計なことを考えてしまった。)

今回の地震の際に山元観測点で得られたPGA=1.4G, PGV=76cm/s, 計測震度6.4などの数値と周辺の軽微な被害状況との関係には納得しがたいほどの違和感がある。古い地形図を見ると観測点が置かれた敷地地盤は谷地形上に位置しており、局地的な埋立ての影響で0.35秒の鮮明な卓越周期が出現したものと推察される。原因究明のためには余震の高密度観測や微動調査などが望まれる。

今回の訪問で幾つかの震災遺構を確認できたことは大きな収穫であった。いずれの地域でも、ただ単に建物の被害が震災遺構とされた訳ではなく、それぞれの関係者が震災や津波といかに向き合い、格闘し、克服できたか、あるいはできなかったか、それらの教訓を後世に伝える意義を認められたのが真の震災遺構であることを痛感させられた次第である。

冒頭に朝日新聞の記事を引用させて頂いたように、今回の訪問で痛感したのは仙台駅近辺の中心部とそれ以外の被災地とに生じている格差であった。人口の増減の問題だけでなく、街中を歩いていて感じる活気の有り無しの違いは決定的なものであった。確かに防潮堤と嵩上げ工事はほぼ完成したのかも知れないが、それだけで本当に、太平洋沿岸の津波や原発災害の被災地に人々は戻って来るのだろうか。大いに心配である。とりわけ双葉町の原子力災害伝承館や近辺の巨大な防潮堤には、投じられた莫大な予算にどれ程の意味があるのか疑問に感じられた。このままでは駅舎がきれいに整備されても、住民の方々は永久にもとの場所に戻って来られないのではないかと心が痛んだ。

最後に、今回の現地調査と被災地訪問に際して、町役場のご関係各位はじめ、地元の様々な立場の多くの方々に親切に対応して戴いた。また防災科研からは強震観測資料を利用させて頂き、東北大学大野晋准教授の研究資料を引用させて頂いた。さらに参考資料として朝日新聞と河北新報の記事を転載させて頂いた。これらのご好意に対して心からの謝意を表する次第です。